

『西洋印象派とジャポニズム』



私の趣味が社交ダンスで、自分のことを踊る小児科医と公言してきましたが、いよいよ本職になりそうです。

ロータリーの職業分類を小児科医からプロのダンサーに替えることを目標にしています。

今日は、ダンスの話ではなく、私のもう一つの趣味である絵画の話をしたと思います。

私は、二十数年前に、診療所を新規に開業しました。

右も左も分からない手探り状態で診療していましたが、女性スタッフ

同士の間が険悪になり、患者の前でケンカするような状態でした。毎朝、車で診療所に通うのがつらく、このまま大阪や東京まで行こうかと思うほど悩んでいました。

そのような時に出会ったのが、展覧会での西洋印象派の絵画だったのです。クロード・モネ、エドガー・ドガなどの作品に感動し「これで救われた」と思いました。

私の悩みが小さく感じられたのです。

それ以来、絵画は私の恩人で、機会があればいつも楽しんでいきます。

今日は、その西洋印象派の人達に、大きな影響を与えたのが日本の絵画、特に浮世絵だったということをお話したいと思います。

日本が開国して、各国と通商条約を結んだのが 1850 年代で、この頃ヨーロッパの芸術家達は大きな転換期を迎えていました。主な要因は二つで、一つは写真の登場です。

少なくとも記録だけを目的とする限り、カメラの方が絵筆よりも速く、かつ正確に被写体を写し取ることは誰の目にも明らかでした。

もう一つは、交流のなかった文化の流入です。中でも西洋にとって特別な意味を持ったのが「日本」でした。瀬戸や伊万里の陶器は開国日本の重要な輸出品でした、その陶器をくるんでいたのが浮世絵などの和紙でした。彼らは、その包装紙を見て驚いたのです。

今までに見たこともない構図や表現に圧倒されたのです。

1867 年のパリ万国博覧会を契機に、日本文化は大衆にまで知れ渡るようになりました。

ヨーロッパを中心に波及した熱狂的な日本趣味を「ジャポニズム」と言い、モネやドガなど浮世絵に夢中になった画家は枚挙にいとまがありません。

さらに、1900 年前後には、日本の文様や工芸品が一因となって、「アール・ヌーボー」と呼ばれる装飾の復権運動が起こりました。

印象派を「フランスの日本人」と呼び、ことにモネを尊敬していた画家がいます。フィンセント・ファン・ゴッホです。彼のアイリスは、明らかに尾形光琳のカキツバタをオマージュして描かれています。

「自分自身が花であるかのように自然の中に生きている日本人」へのあこがれを手紙にも書いています。

最後に、世界で最も有名な絵画はいったい何でしょうか？

そうです、「モナリザ」です。では、世界で、二番目に有名な絵画はいったいなんのでしょうか？

そうです、葛飾北斎の富岳三十六景・神奈川沖浪裏です。

日本人の持つ美意識の素晴らしさについては次週述べたいと思います。